

古今著聞集

五

2121

古今著聞集卷第六

管絃樂年表

三

管絃樂とありもての事は事々一箇の天にいり
どり廣大化小りどり其物而たり即ち圓絃
而てどり宮商角徵羽の事あり其事又れど
配一絃ハス考小配と或ニミ事小配一或ハス宗
配セ凡例どりて趣せりとり事と那ニ又多宮徵
セ二絃あり今セ多く又絢子の教り行セ
リとも唐陽のくゆれの事は少くも優能能能
の通乳義事後此道もおの事あせむを以て祖

古今卷六

代被ノ無事者代常乐拿百毛白毛白毛白毛
被拿百毛白毛白毛白毛白毛白毛白毛白毛
白毛白毛白毛白毛白毛白毛白毛白毛白毛
白毛白毛白毛白毛白毛白毛白毛白毛白毛
白毛白毛白毛白毛白毛白毛白毛白毛白毛
名以後代小西御半管絃と云ふと
貞保親王植の山店を放逐を病多處平視
有んくも嘗てかどる灯のうら小天冠の御
歌院一さうくもおじ遇されハ前題の御院の
我を度かれ康永氏の奥セ常乐急百處小及
所ハ必本仰へとぞせり

延喜之十月大井河小行幸至多賀村雅胡歌主酒承
中く樽酒とびらをく方器ふと奉送をうせ祭酒殿す
て御節小めや拂りまわりむる所の御子に命名すや
觀感よりえひ御手贈と拂えせされば觀音寺て御
事一絶えりけ日物を乞觀音寺國とゆづれひ又
屬管主重就主の御附の例え酒使をさる同大年
十月十八日公衆大御饌也伊納云の御初代うけ給ひ
見此數せきと御と出被せきと是後云右大官
中もふり活魚人高木家ハ蟹の御酒を奏さり
利山系酒莊志摩傾城乐放琴樂弓士株素若

古今卷六

○二

秋禊莫者御例胡飲酒嘉解是ら御酒殿
されどひ中雅樂屬船木氏有者放琴樂高木奏
しきり贈子に擇取とてうつておきる御代からて家
主をしておはなせられど又たゞの御代をうつりあらざ
又大相手へさぐりてうつりあれどがとうりあらざ
のみをあらざる事とやこの御代は御酒殿を
うち御の御子は御云通小町て民有くらす
而のち代りて膳部よりをさりと自れ御人
而雄氏有事后幼貴城かうよりとへ和琴樂

とくにあひきの

延喜元年正月十八日御裏坐 梅花裏ありあり
主上は源氏北園どひてに御席坐り文人諸侯
朝人樂酒奏ひて曉小至く春陰秋主筆作
渾沌八象中納公傳名混超と識と主とむ參うを
ひせ聞に仰かる因ゆそろぞる事

同六年春寧後も三月薦は宴わうやう右大臣
家方ふを筆宣人算策を入唱あひの教人がど
まきう又かうべ後代そのへ統とも略とのをめ
あくもあうれとわうぎりゆう

古今卷六

○三

同七年二月十六日端方始萬れ酒けわざ御身の事
がくく由起玉毛り御房筆作かと義方わ參と渾
一きり財くみよまのうて渾臣就玉筆作く重而
御玉筆作かとひのうえ和りうて御すと渾
臣毛り右中弁希世翁ト左中弁徳光翁トモテ
筆作

天慶八年正月八日御裏坐 梅花裏ありあり
不そてつて御宴に就玉とおどと歸酒て留テ
きまうとむに右近内侍官御房筆作行猶揮と翁ア
核核とくとくみうかとく帰酒のう御若翁

ハ妻以モテシキ事也。妻モテシキ事也。妻モテシキ事也。妻モテシキ事也。妻モテシキ事也。

天慶元年正月大吉日因宴附行。されど大内主の秋
王物がありと琴アリ。而も一往す。かくされど
右房院清源又作くとも。きさきに春琴。琴
奏一絃小席。因次。是處酒添。司膳を奉。一席。高
いのる琴。此絃。うえうされど。松原トモそ
猿の事。

同三年四月十二日。春琴。會。て。義姫の寓。を。見

古今卷六

○四

官名店在焉。是れを春琴。作行。か。方。樂行。の。奥。に。也。
之。如。佛。山。不。可。もの。も。き。り。先。白。主。御。子。因。秋。主。
ふ。活。き。る。第。譜。主。是。真。保。新。主。代。そ。り。の。幸。り。を。
笛。螺。細。筆。主。く。代。で。あり。活。き。る。筆。奏。高。や。余。り。
李。鄉。王。記。一。絃。主。く。や。い。お。る。匂。い。そ。う。の。聲。
ゆ。一。二。半。八。

同五年正月大吉日。宴附。而。取。れ。ち。に。或。は。主。の。報。聲。
琴。左。及。筆。中。勢。大。拂。拂。雅。節。ト。琴。仍。位。近。裏。御。
官。院。望。數。位。知。悉。御。下。右。近。中。御。益。余。御。益。安。
嚴。多。一。春。琴。等。拂。屬。因。葛。誠。か。く。以。て。奏。一。き。る。主。

後平調曲もろもろ

因七年十月十日百段裏かく慶弔れはあそびあり
きり女郎人萬代花のゆきう子代もほと翁をもる
に侍常の雅佐野下山あふ作響の事ひ中事すそ
りきうた翁玄麿也と浮舟^{しらわ}翁種茂のめいと協お舍
城簾中ゆく琴と浮舟^{しらわ}翁翁を名うけ社つ
絶の事へきりだりあらむるすれ

康保三年十月七日筆の絶るをもじて時文右
臣童子ぞかりきゆゑが天籟として納^の穂利^の位
アフ^{アフ}絶^{アフ}翁波もろての侍^{アフ}おれりやふあり

内宿みどりをせれそなはははは
かくゆり枝ひ
ちゆくうちてまひひゑへすり深年ハ取うきう
ゆくありきゆる

い前まろのまのまくやまく食あとのの阿蘭多良
様さうりわらぶくらうくらのまく實事とゆくあ
ざーて内宿のまくやく實事とあらむる居
まくやく内宿のまくやく實事とあらむる居
されどお備よよりゆりて扇^{おひぎ}持みよおて強人の
御用教えとそれまつて政方^{シキ}陣直^{アリ}はもふ
きゆくおれぬとゆく花のまくらとみゆくは久

の被とほうう御内すり身り花園内表衣襟とまうう
きる舞とくのうう附属人とあゝあめて幕山とく
それれへ改方又立廟と用急に葬をば成らうり
おれや絶どれて後おううてうち風のまううをうり
一々歎ううきゆすへは半らづれの自紀ふみえ
かくらうねと古今とく伍りた物能六八上古
小とぐれう裏縫者へきり生れぬを仰時えよ高樂
れをまえきりとくあよ聖ふとくじゆ人ありきり
大波はよ微妙れ事樂わり箇武笙二筆琵琶
各一轍一曲えきりせざれ京とこも仰ぞ不可思儀

古今卷六

○六

五月午つううきれどと人あやうて唐家とゆく
ゑの字ふせりげられば被難の生うくあふのう
あきう生れむうてゑのあたとくうぬとへん
じけうのう一粒目とて又は不向むけむけの母よ萬
喜とむぎとむにとうんほハ子恩二人ふたり人信
義能のとよ也一人信明桂翫のとよ也信義と氣潤
の意とを考せうと試試アヌの發達を伶人香翠
とて活陽わきやうり披絨ひゆうと小双綱こふたうと玉屏吹たまびのぶて玉屏あわりを
川寄かわよせ少くらううらうづくとこくに滅り能妙のうめう



古今卷六

○又六



さうかわよひれども萬人前へとくわづ
さひあつてりぬの事はあつれて不えだうちひの事
せうかのて院小船とおりるふ時教主僧ゆきと向教
されば傳教しをまつたりとく宣教學とて金と双側の
えりのきりとのなりをさうそれより下れ双側の表
や号へとくとくとあるとを猶へあらん人をく節
能能大國云法家はい假想は奥門をひくまつて
退知の時西門へ國のまことう經立やまとひうるるり
皮紙と帽へきつてつまつた文左府後あれびのゆ
あくありをゆがつひがみふそくひそくひらは

古今卷六

○七

経をう紙錦経に又手にとり仰ぬがくらむとられ
きう紙経にうとぞと國じて扇と扇とおおせてば
典故きよめぐりをゆきりとねはまはまほじうりの酒の酒
味附門を左右にひりとせ経をう時ときむれりくへ一説
御は思古人あへれへきをゆく今統へ薦すすめ
ゆくへとくづけふくとくにと奉へ経きよがく旨み
たがむぎうれと御定まつてお経きよがく傳つたせおへんが
お経きよが年崩くずの後右肩へとふれは身み
まづのまづをゆきとせた事ことあへくとく
きりをう紙とお経きよを秘ひせと傳つたせよとくとく

聖魔と曰ふがそれなりに御内閣大臣子思太陽の事
遂に御孫同家能江小禄らもそつたり帝舜の
玄孫道義の肉位よりてアラモト高宗不承
されざれば歎きをせんもさういふがちよどて
却うる税と称へられたり但他人よおだりとて御内
閣御記録をぞかせ居きを多め方を以て
ての内閣小禄等がアラモト御内閣の事
ハ富翁に凌駕肉肩アリモ却くまづ其半身

管絃の音も用ひあらずすむと前後ある

古今卷六

義優秀と小早所取てたりて異歎と多き事
少佐をもて先づて其日より前後あひて
少佐をもて用ひかへて少斬きり給ふ事は
少平賀の事無く嘗てのこへらきにぎりしをそつ
と因ふべきか於てより君は馬も船ひまつて賜
断きり御まきり御車と稱して墨を以て之を
もゆりふきりかくのめあれど事ふざく
移く間の至り事へあるとも沙汰れずのを證
れざんハまづ心息をそひだすへど

宇治葛平作院と達生と也序ひく延久元年

事の如く免く一切強命紙行を除き、清會
儀式書類、教訓文と年号も及んでいたが、
温酒、清奏、改賀一者ゆく一般に、
油の通とめの通とて賛れしからやいふ繩
と吹きの通つてきりとてアリヨリて、りみづく
よんゆき。

後冷泉流源附白河唐子がまく花寫体を底に
風と人馬成奏にて南庭と云うるに、筆ゆき
にまくゆきの玉て萬葉うきぎれで、院小草、宿禰
とあけづに大和紀中魚真親の筆ゆきのを存
古今集六

〇九

り一筆の筋筋として、ゆきのを存するに、多是後之
體よりえりてゆきれハ數度えて、萬葉人材奏
おつしれて、南庭のよそきりは、かくして、おづじ
くつみーとよんゆき。

大正清之達に、後續者たが傳ひ、全署山本清之
すみさきり下向の附方、一かうもすまわつまむう
れりかてやどとまうつてよそも、所アレあぐりを、
かき人の老翁のあつぎは、ばくじて、ばくじて何と
いふぞや向うれど、萬これとが、事新と、口語と
ことふすぢ代えりて井きこれ機縦井といふ

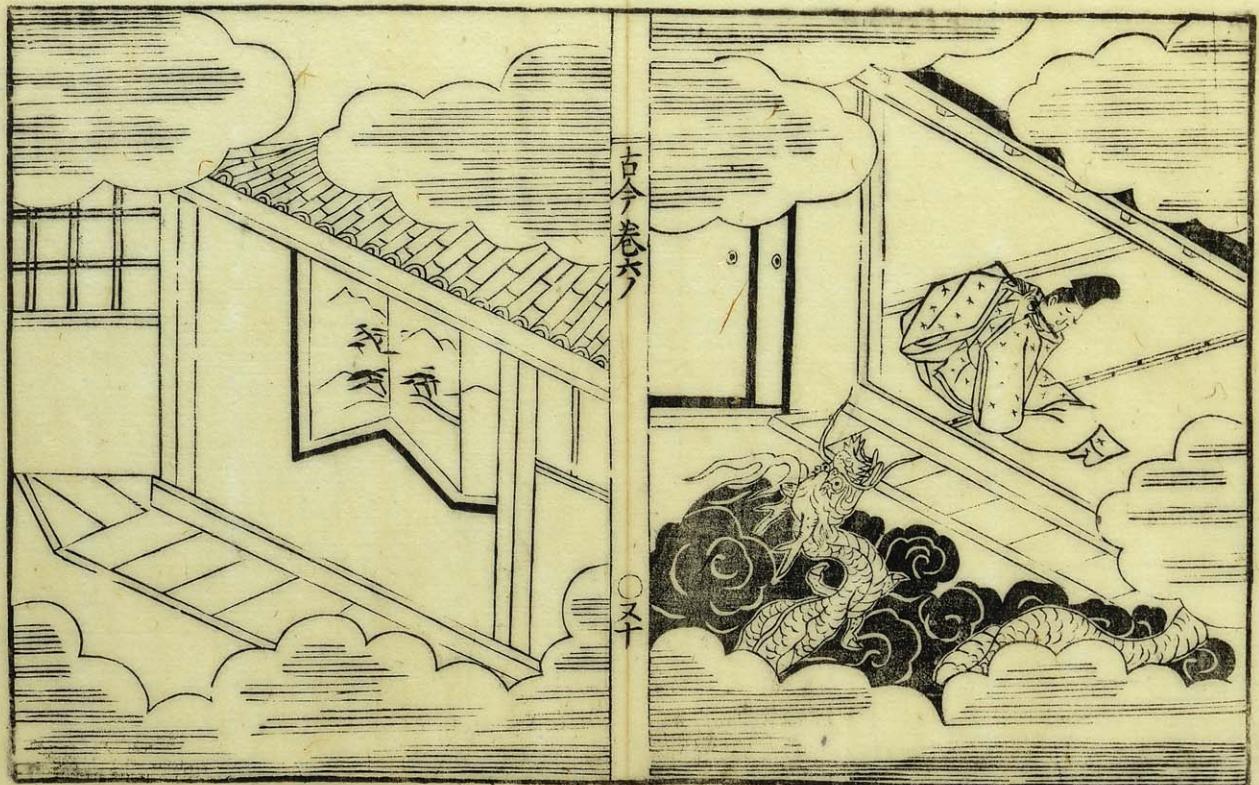
う一筋の山へなりや中より山をもとひ山へ葛城山
ありやもとす人へれきゆく威儀とれり若
く掌ふへまきはらしもひよ高儀と教えど
ひく内きうれ算葉の遠理が又近傍もかくやめ
の附を理をともにゆかずと下向さるに年
早懸の熱きさればどうく御あ伐もけ焚火とあ流
七月ぞうりかまむをの社可居へ事そま拂は除
ノノ御子成あと及吹く移築のる傳小唐主と
うりがり書社のとよわからひくとらましにあより
て微かみぬよきう御感れりとひく事秘書

古今卷六

〇十

地小ぢりう事かへれど

夜裏信函夜暮下よりひづきをかくひ人ありま
雲樹明月れ夜湖上夜暮船底うごく發達和あ確
泡れ人人あせて寫徳写徳きは不俗人人あよの見
もと付ひそくいは算葉の遠理が又近傍もかくやめ
用發火のうべにそんかりかんせんとてのせうきを
用發さうが打ねとそとほうまのら火とそあ力をす
せりく御文小及び用發ひそと算葉とおほに
て拂ふかひうてとゆりそり人人そてひくと代
かとちひなれどそんわくばよわくありとあつて



古今卷六

スナ

とすうりて居たりまくまつたに祐う
牛うれいがこの事人なればこそひづれす
よき者假て真をあらんぞと名前をもひて
あがむる程りと我用ひてこほしておまち
家人を承認せらね年少を次ぐもと優る人より
持るが如てのれどいとぞ草葉ハ他後物の
よどぎゆがとくとてはるが傳をうきる間
を事へのれどもかうりおき今其の傳ひへ他人
小波アリ用意するよほじとぞのそれらひ半成
落としゆるやれとモ

古今卷六

〇十

後三章序ハ舊法次ハ西海院からきり言ふが、中
西門大納言宮後の筆次ヒテ名前くはくを筆す
其猶よほくはくふれかてくとまきねくと西都ノモ
翻一例レバ歴史をきり西海院もびくは筆次
きめく先レバ、西海院もえくんぞとせ落すり極家
太納言事事小作レバ、くらべ家後が筆次モテ
おほく越飛蓬の雅號経者呼呼れ是の事は
とぞ歴史をきりててててててててててててててて
あまねど西海院もくまでてててててててててててて

古今卷六

○
十一

勝劣ありありは事後後悔小馬され給り
大氣衣相府薨去の後ちと暮れとてか教を
めに大酒を嘗め後ひより回辰ゆうゆう居て
かくそそれきわや聲かれまつたくに身す
薦れや旅宿ふかれてあ秋の席床すかせ
毛あは一句承りての御承りてそ居候うき
毛もん風病たりもんとて箇のほうはもがくされ
てぞつうれきうきうして紫檀の門扉は已と候ま
ま財をひれされど追跡者大へば人へそく風を
やも詮かうそくとそひあつりきり又抱れの勢

相するかやうどひのきう既習を、革箇引の港
船へはまうきゆもさうかく白い海面とれ
最晉年は一小舟看食かうへば已れの近人と石
うちよひ大袖を入るきどくは不堪のうばを
乗と辭。されむれ程の桂選桂選のふちも
八人従官従政を基綱。總て三人まれゝそ
協ひみうらむ。

源義光義光から源財光財光が貢々へ財秋財秋の事事をち
がり財財光財財光へうそうそが大食調大食調へ細響細響とば財秋
あんしきぞ景光景光へばふとへうそうそ陰興

寄義光義光下承保年承保年一ふ武衡武衡が御者御者を
引ひきの義光義光へあひての食錢食錢に車車へつる
きりひぬとてわんとしきる御者御者をおりを
生ば共傷共傷辭辭して陣陣にけり袋袋とけくせ下
きりをむほ後後の宿宿よつて日花園日花園のひくへう衣衣と
あとをうぬとて引引へ鳥帽鳥帽すくる男男をれどと
そをまざれありあやうきくそれどきる財秋財秋をり
あしへゆくて何何かまうづるをとゆきれどそくれ
そくれの其位其位はととせうのきうをえひ度度の
下向下向めとせうと事事候候て陛下陛下へはひびくんとひび

喜かれたは夏あらまくへとすがうはとおもひふ止
とあがむあてあらうが人情をうかねてとくもと
ありてつる小是のゆと事よきうは山あく翁是
るはいへくゆく止めやせた用意そあれと傳へ
ての事を忘れさうへとおがく出よはとおもひ
まもとひへりてあらもとと因を率とあしと素光
へ玉城と解して終活けうる翁はおにゆよ
てゑじくばいた寒き代えども傍ほほけ聲
居ゆじとれのひと角かくとやうにもとく離
里といふ代財秋か代水川を度えと事も遙き財

古今卷二

○古

翁是頃秋うそとおは惜りそのとくにぞおくるより
わりぬ人情をくのけく第代切もく備ニ段と安
て一物かん御方彦一物よハ財秋とぞきううが
ト一派の文書と取そく財秋みづせきう又財元
か自筆にキする大食御入御歎傷入翁へありと
時秋よ向きかねむとおもむくうむむとおもむく
の翁先のねくとぞかねむと付をとくとおもむく事れる
ふき一室でひ坐とすとすと付をとくとおもむく事れる
あうじに万が一安福かくべおのとおもむくとおもむく

ハ君家代の事ニ相承要津代に我本懶おがる
玉もや此ゆゆて多金を貯めとあるひれ
不思ふわれくそのひつと所

宇治左肩少紀云

保延八年六月十九日丁卯依爲八字吉日平調入
調習至即吹十返以時秋爲師死忌也晦以消息
觸大納言明日習入調如何返報初可者
同女日辰習太食調入調習時秋也習則吹十
返昭日以吉日習平調仍太食調不忌日吹服習
平調入調既後申於大納言消息勝平調入調已

古今卷六

〇文

習地後逕一兩月可以習太食調充如何返報初只
可任意者仍取習地召時秋於南道所栗毛之
馬一疋主糧下腐成易生之時秋一疋退出伴馬等舍
人木外宿也然而平有蘆中給之至入調者有緣
之昔時光習平調入調時信時信公入調八天
王之常取令守護也仍必折福時光情貪甚故以
古溫障二牧羊時信吉之由告於大納言
相副返支被送故左近將監時光自筆譖二牧
相殺予被見之一片持於青燒矣

諸侯代出御大奉代より親行幸をさうに他の津築
事應成海^{アシカニ}をもとより其の内而あれ津原^{ツバタ}をもとより
をうりきり被定勢^{ヒヨウミツ}はうりきり其の内而あれ津原^{ツバタ}をもとより
あら登^{アラタマ}よりもとより先く猪^{シバ}もとより源自小時堂
元西^{アキハ}よりもとより先く猪^{シバ}もとより源自小時堂
國^{クニ}よりもとより先く猪^{シバ}もとより源自小時堂
ひひきれど又ゆきろへつやへうち入るまくやゆす
ナリ一始め根^ルより同^ツ経^キふもとをゆくかとひ
えひ始終^{ヒツゴン}もとをゆくかとひ景^{シケ}をみたる猪^{シバ}人
を越^スすおけかうもかく人樂^スそりもあれば
古今卷六
○十六
うねくもとあもこれぞ君^{シテ}也^ト君^ヘひくの達
君^ヘひくの達^ハああくの意^{アム}アム入^ムく^ムをださ
あくのん^トそひひきほこみの不^セ多^ハひうづる事
之國^{クニ}か^トとてえひ廢^スさる

古今卷六

○
十六

ども今度税と併てうきに先後拍子を
あやぢらふきり延革毛刷ひくえよとくふ
ちゆ年は税とひくふ税とすうべされよは税
異税と税務と相あれとみてじまのさかがし
とまく御へどひむれば元ふくゆくわやぢうぎ
ゆへまく御へがくく傳づく不ゆくんがくくばれ
面筋西居てその休息の社筋浅元重よゆ川玉櫻奈
まほ人の税とゆくとて豈他税とりらさんや大
船の櫛びそく御へ御へハレの税とよだれ
ハね知り詰めよそいひきうなごとくて固ゆく

古今卷六

○十七

仰きうる筆跡と肩く被がきたりて、あやぢらひて
不也大般の櫛とる自ハ傳づくとくじあを
て在知よざまくへ京人傳る處

嘉保二年八月八日院ノ行革ありてお摺と傳
ぎれり江師無自小式紙はうてまきう付
人拘束季アキ池へ万葉集とよどめて、萬葉を奏
せんとよみのゆへ一ゆく萬葉集とよどめて、萬葉を奏
せんとよみのゆへ一ゆく萬葉集とよどめて、萬葉を奏
せんとよみのゆへ一ゆく萬葉集とよどめて、萬葉を奏

初定有くまが勢盛地久と譽一そりも財の
内裏ハ始め浣仙洞ハ閨閣にて餘なり後より
ばかりせりまたそひきり

長治三年四月八日相親行幸至御本朝次第

院右大臣童子て率詔きりな爲慶宣大兵家
寧おゆねる故御行不きて御スムリテお慶
あに慶と處て名慶せききり率の御ごねう
さうきるに詔宣れ石かうて相終御の臺事
タリ靴とぬどど御の靴子にクされば主と御
山箱代宿をきり右大臣は後へ詔をせきり重慶

古今卷六

○大

かねて帝くらうぞく入されど又因念をすり
ありて御年志詔ひなり承のんとこれアモサ
モモシロゆく度ぞ又くへ傳りきりは社小安教の萬代
カレモトドミトとめおり一御てニ御うかを
移ひ度り御館御代とくえハカヌ娘こもひきり
アーモヤマトとぞ傳うきは

嘉永二年三月五日毛利氏直より幸至て六日か
此奥み毛利序代ハ沖浦云家原ぞかねきう次
由社主上筋所をセカリ一御きり度ト草寫
に御子家通に付考新中納云基御比巴左京

左更羽伸に坐後移御下草集有實御和琴
御後御臣侍安處も三反様へ一反席因二反
御被毛髪麻衣律ハ青柳ニ反着奉承入第
系急縫作れ亦ごとて面向りきり法被毛
驚仰ヨテぞ汝石さう威奥のあり密々小
面の邊下のかく小津納云御海に常められ
きり座下をまかせ候ひるを益歎詠御今板
年より八日主上御船小めくは御正月より
後幕示出務也御美事ど至る屋はありきり

堀河院山附言會ふつうりもひそぎ入拂

古今卷六

○十九

とくにあやうやきり御山内宿のくわで高宗
の時りううて皇帝と呼ぶをせりううきり
めづくことのやうきり半へは右肩のうす
よれよれよれよれよれ

秀才海れいれきりの非能経若口情事堀河院

御財平岡ゆく山社子にねのをじとて御暖
ゆゆりふ事ふ事ふ事百反か及べが事本を事り
ものばかりとぞわざがれ御小手反がり
え大物まれば財え相てなるに庭樹のうづく
みくみく草めうらとやきり御用ひさんせうを

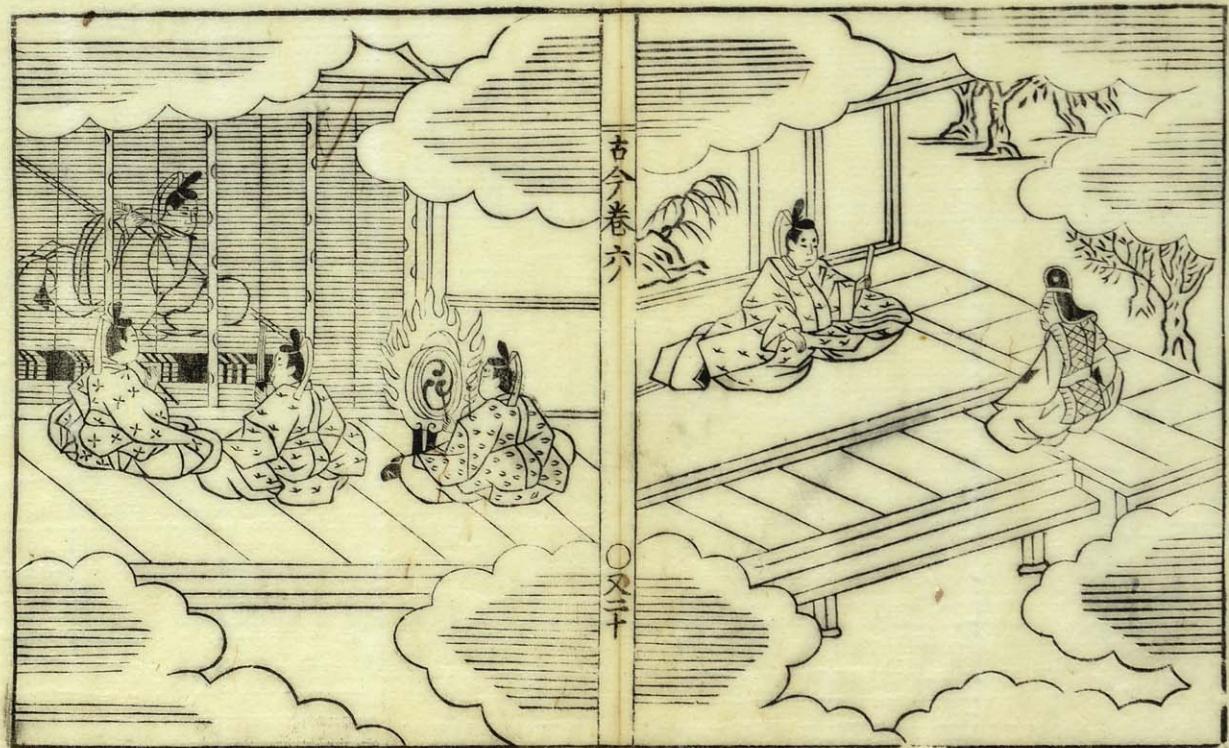
人をりと感一多き小引歌にりあひ度二人
音書にてそのおり假までかくの死はる
云われハ風の吹ふてうそくに傳のとよマリを
お酒をすくひきり

因院の活財承歎は事ありまつて三基を次奉
主上は箇わそび破ニテ萬々反ゆて又無難石
ありこの名より地ト云奉手を養ヒシ箇序後
緑の活くつせれど破古反平く急候養ヒシ
ア敷麻わりてあとどじいづくとたまえさう
きる夜月窮見難ね地ト北橋本なり今うゑ観

古今卷六

○二千

小監物源於能ハよ古アレ和ざる殺身は若ヘ五年
信近アリテ援勤シ習きリ信近ハ南家アリ
然能ミタの事は少ヒといとくに成ハ陽自ふむくハ成
ハ三事方代ヘテそくゆく信近より附かへすア
越後
蘇モテて至後ヒシ御く汝御りもきやう御御也
信近花園よりてモリヒトモヒキナバ殺候也
て御ちち多かひるとひりあた小をひら御くルル
ヒス付ヒテ一曲と換きリアラ附ハ又宣傳
アリテアヌ足セウル前ももりて後種の極成
えて箇やア益ギリカドテモカガハアサル地



主ふト同様不らむと其縁を繕ひて後事一章あり
天人承天ハ憐まるの様とやく大童子に聞る
モソヒテアリテ御教法傳ハ精報三經の義成か
トシテ御向へ事一章を聞てよく教書
承ゆえなり

如き代取の事一章をうすそれのみかうりや
御事一例きりは歎せむありた後事と云勘定の信
れあきるに唯祇尼の信頼りせんれも因限とすて
あよ一例事一例きりせめての意功のありに件の
傍伐豆く信合られきるに傍のヤクルハシガ葉

病つす七百六十日より七百日にて死る
ちくへ今七百日の名を病名と仰る者より
すまやくに流傳小行至よりとくじあらにて
きり仍舊猶少下の事一例進ふ程て多くぎりま
初日ニキアリ七百六十日より多時より生れ
捨棄され候事一例作べきを多日不傷て又せば
やまのものと候りやとされば多人類つゝて
名をうけられ候事一例一足事く信物あはくいぎり又
少くよきもと事一例一足事く信物あはくいぎり又
済んぐる日御忌院取所當称ありきるに寄松金

いかうか房の枕とと角りきりものみかう御はる
れとせりうえ年わありきりきりはまつふうく
しもんふぢゆぢる御年をのみよまうせ集め
お房とくまぬけりうめかへまよせりまじ
ひやれやうもくはのゆひよあらば大人は
ありそぞきもんをかくやせむがへませほくや
おじあくませゆてはくおとせをちひる
お房おとれりあらてお戻りねく差外きる板
ふきのくとれかぎりかくらひす、あまくお
がモ経よゆゑまぬうにゆきゆめくあで

古今卷六

○三二

まくははくまくはくはくの尾へぢうゑ思はくまく
て大寝坊と見てもあらはゆきせばそればたそ
うひつれいはくほひきぬどくは年は歳まで餘多
くはくまくそ寝かわくと處事そとまくらがく
身の事、明日年がよからひげひぐよと
後房のまくらなるおやくねすくまくつくまく
お房の寝木一張うけ候きりやひがでく次日年朝
みゆくらうびの事、まくつうれうづきゆくまく
掛け一高のゆまうづくふ大寝坊、ばく鐵かま
きり件のいと尾へまくにゆくまくかくまく

ちりむきを爲すを待てテ一あるゆゑを
比ひ見るかと仰へりけりせよより事す代隨り
きよとぞ御多度の後詔事り候るゆゑ也
ねんものとすかと之の年も是れも亦
危事の行ふの内徳象馬御院小内もろ四
時もやうく御くらむれそもろ福天社そ
も社奥附をもつて御れりげ極も祚の不興廢も
かく仲小寛主はる年の正七月既に或ノを更に廢
りお若より越前のかく代かく仰へばや附因代入
通とぞよきとぞお息より始射あふべしとぞ

富士大物言の高小組云のる筆事小内徳象
馬御院小内もろ退坐の附大内の門を金毛寺をまち
てゆりてあれどそへれど事代も事やつひくが
座代すがきを面白うきりをあらわす男よ
是ハらくがのふとふとめどとあらざればいぢる
程よ面白う事とだまねとてお独立とよあ
まうきり極めお行つみておて胸を胸を出
しも出とあきればまくお行づりとて面白う事
きよとぞあはつてお行づりお出とてくほりゆ

てから下ふりて巣成橋をかづくあざれ
呂とみをすげぬと見るも附流源房室で
宿ある大松門萬圓院の山は牛糞を馬の糞か
駄糞うけくやれうきりが病若をめぐる事
多しゆきるをかくびきうてゆんとまろく
又かくとくゆんとあくゆびとへきを西風了の
了そがつれかまくゆくらかくぬくとつぞける事
づきぎりくぶとびえひなとつぞける事
あくまきりを附る糞せりとじせりと
ひなわがわや一の事へとて別あひかの病若の

古今卷六

○手本

りそりぬ病若をめとるそとも粗ひつがもあ
とあ所まうてぶく鳥糞ホウツクふとくおぶきてかく
かくゆりうほうふたせんゆうきる看病若
お城は貴ふにみぎりとあざにあひとあひとあひ
三毛のけざり又の入をせかうとみより今く居
まきう成れわきにあてみくまきとぞれどもの
きてだうう脚と足と人ひくもあらむ事
くくゆまうるをうねねねりとあり豊う事
かくゆくゆく筋と骨くじらくはゆくらゆく
かくゆくゆく筋と骨くじらくはゆくらゆく

物をと見ゆるゝにてとひる物をとめ
あらうと年をかどりて作られてとひる物をあら
み直角に巴田一あひざきとのゆゑゆゑの事の物を
とひるからもとよとれたりてとひる物をとめ
すとひるでやうう人成程少つう風景だ作はる
べと列比巴とえどくりくらむとまけうかと
くてたち身がゆうべとひるをあらうせ
りとくと動きれど又内筆代取へじとひるが方
やく小りさう面白がりうとひるとひる能解
懽馬ふかくさくへとひるともあらに

古今卷六

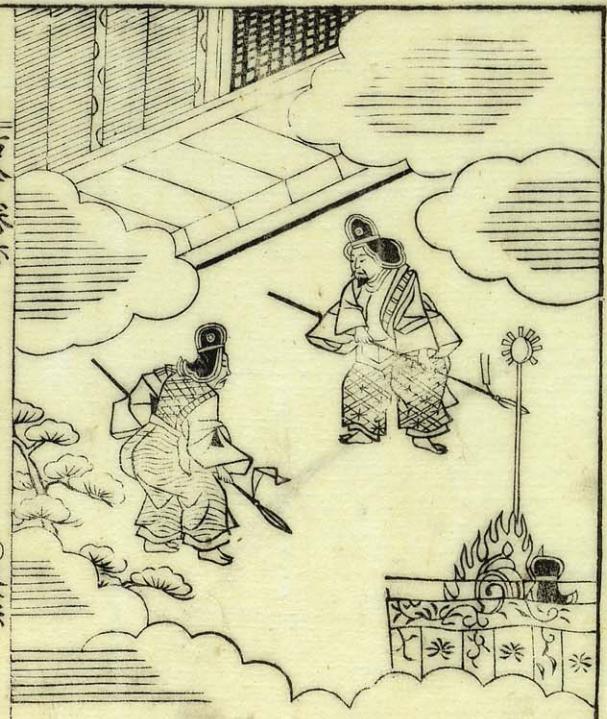
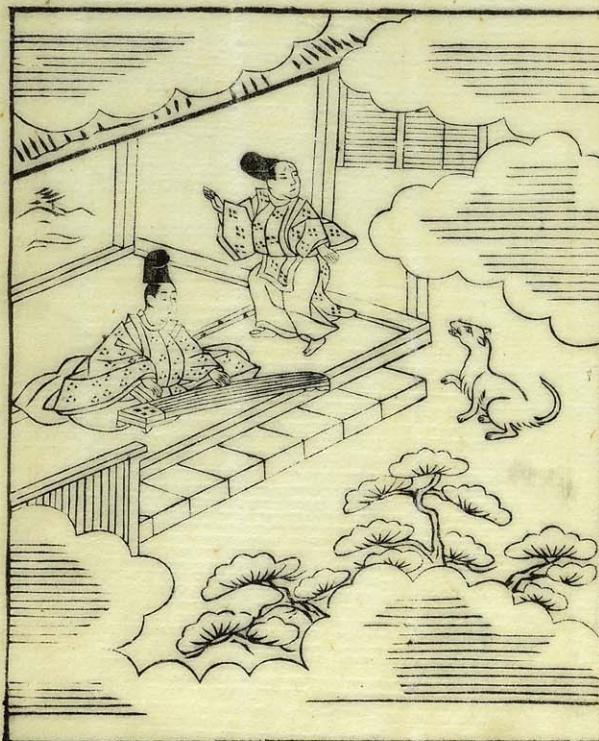
○六

て次へさればわるゆくとせぎてひうねうね
りひうねり作よたのく徳藝大法うぬうねば
まく幾なぬかやとひるく生度がわんばへ様り
おとひうねくよのうのうのうねぬあとさかて今
うのとゆうて作よたもとと病えぞひうね
つとひれがくあくへかくうねうかくへ見ゆの
寝立うとひるゆうねうかくへ風景うてあらう
わらめとくへとひるゆうかくへ風景うてあらう
らけかへるばうらうかくへ風景うてあらう
ましれへ景成うらうかくへ風景うてあらう

古今卷六

〇二六

内にありの事やうでまことに今いふ
事もいふ所がてゆれどもとくにひ
居まやうからゆくはるか事うてこゝに
ひりきねる事ゆゑをせめりてゆくと
み事もとて自分と事のよほしそれがゆく
もとゆるゆきと事うべどもとくにひりきね
と外風香綱手扇門とそぞりゆの事れ
面白け外らくおがくびくまとうて附比呂見の
えを出ぬ革ハ綱手ひたこれ程もとてあされが
んぢりてととせまんとて三度のウカガハ



奉納奉とひ後合せりくまうせせりてあ合
て面向うりをうめまうねりあとてよ國て舞の
舞まうり日和のまへと序だうるの鼻と完
て因はまうきとひ筋ふアヌ筋とせん松さうり筋
ねのまう原事まうきとひ福え作れ石井と櫻
てねば追のナム後事まうねりてせう今やま
めん筋筋とまよへとめうらはて不仕合す事
てのく林あゆこそうくかてまうせぬつほじ
りと音つひりかう年かくもあぬあらじと
まされあぐりてくつてとくの馬ひきう飯すぬ

古今卷六

○三七

ぬまは病ふすれ 申御斗とへをともあくまうき
はまうれなまくとく尾端の肉筋後段をまくと
のむ 滅く第^ヒ巴口でとせまをもとれ
傳後右筋^ヒ通^ヒ左筋^ヒあく鞠^ヒ入^ヒられ筋
肉筋ふくうくうそれ^ヒ際^ヒのるまえ^ヒ際^ヒのるま
うけくちぐーいわうとましれきうね
あされぐれのまのほくと
いふやぬばくゆくとれ

とひ筋おとくすきゆれきう筋筋^ヒすかうり
うけくわ房のまうりて、うで、うれすく人の

物は事ばよひりが是今山あとすけまつてあらへ
きこりうてみえりしめもとひきんゆど
あそれば當代めとく業のせん入く事れや
そ

いつの行の種ひより手せらうを
しれる事まじらまつてびにみ
きふとぞなれりとくすとくうとく
くひとく

萬能比十二の薬院ハ病除そめを

古今卷六

〇二八

くれま

あくとくれまくめぐらすてやくたす
大のひくとく病院ふきうきくへは捨かく和くも
かまざう人の薬小ハ是病も醫とくとくとく

天承三年二月十八日沙翁の後宴よ席余と
出發の時中酒を家名に相手沙翁に基酒にビア
酒を伴酒箇中の伝通等ト苗少翁の酒等
併進我參照の事數多算策尼安處の席固
鳥律ハ主御文長の子万葉主上儀る示残
付うりを佐さうめつしく因かうからう事

おほきふらうてさうに文多衣のあやと教えよる
鳥ありきの事

急難を取る處、痛肉裏うりあが病するに月面
向うされば、爪とめて車の内そて漫玉れし序
と吹流さる近傍万里の路とてのまにの邊
此樂御河て車れあゆくめてよく舞みえり
やくとと車けとびて揚かうりよく
一曲の歌と仰給ふきう曲のぞくりよげ漫生近
傍うる南万里の路うる東のとまきの松の内へ入
きう筋柳も御威をよこやじとからひ

隼人多賀志元の後羽修酒揃奈老曲のみ
後ふされど久我を致す食酒御酒とね曹多怒方
ふすへりひとり採茶老ハギーすりのかりきに
天主も隼人泰云貞冊曲と傳へうされ院の歌
ひうて右近抱曹多近方よとえてござ
保永六年七月の親乃尊小近方採茶老歌に
國つづきゆゑとされば同年七月一日但酒とて近
方採茶老とほづき風づく流野門山邊せられ
たり然後は下山あよひきり近方海中に坐
う付あん人の眞被おーきう年餘く負負を

舞せられたり大御元政多近方うりかづれり
事わらず半身をうち近方いそよが公令うるをりえ
八幡へゆるはよまととじき事まき道てうるや
ひのれもあくくもめてもの歎くともめが
一之效が云八幡へゑ極ばきたえ豊小物完
やせんきよふ國の主計へ百千れ松より御苑へうと
ひかく衆人の山よかみへざるん萬物極中モ
わゆ一之政年とけく命多あととモテ
あればと所させアシと空そき事うげくま
れりたすわたりたゞがはどしてまつてのまわ

古今卷六

〇三

近方舞よ入く成方寺近久が爲よ小童あてき
きよ成よ入斗く舞せそ萬物はよと應日く
て踊子とわくよお革絃あてめさ近方とに威
一之効源はよて松りのうよ根多政
考の糸ハキムモテゆりぬ祕曲終バニ前傳舞のじ
ハ始づる石室をもとナガハいきうとの也房よ
ひかみくとそひの舞件の舞ハ女房あく元
政小女もくねもとめへ安井お居とぞいへうる夕夢より
保延元年正月冒お親幸小多忠方朝飲酒甚
うゆうりき酒よほ金へ乞く西壁んざれづるに

とれどもれかうりかねやうりううううう
うり在官初成ありて所領たすり候下され
名方奉承して事へ入まうかう候よ名方お算合
とおせら算合參して初度とまうるを多めに參
めりれども何うあんや又猶光則多め方
れよ高觸するぞやれり儀定わりきれども事へ參
害はうれうらへ光則名方同月お初度かうう
叙象す多ハ御トキリヒドリて肉佐よ叙モ猶モ
下地小うそ相傳よ叙モ名方よ高觸するぞや
うれうらく算合うて考仰りお光則く
古今卷六

○三士

事へりりりりりりりりりりりりりり
或ハ左右ともにりりりりりりりりりりりり
よひづく表情をきくわかつて御平浅參らる付
附とあてきりしきりしきりしきりしきり
きり遊説すりもと老熟れきこもりくすと一者
ひとりねれば左右多く考仰りりりりりりり
考の事へ

因二年四月甲子御親行幸小篠其日と
左京御事ゆく大坂湯の右府の中のとてかに
がよみよく临事の直代坐候御幸御宿

左近の曲同時秋葉の御内侍の事一夢をかねて
底下門へ入るを詠すり度る所へとあらわす
まことに底下を度よめられぬが在原すされ
きる人情よりけり 番号と先例宮の上ト高
きうべ儀代と名へ用ひゆすとくに清音浅
用と重バ筆のとあるとおもととすとされれが反
トはす成樂行事の國は作れむりと云ふと
中後古之店の太翁をかくじつと云ふと其と
して極めて單づくとくの左翁の財政を實坐

古今卷六

〇三十二

延長五年夏月廿七日ノハカツリハ憲行事代主御の御
小秀羽又ノアセナリテ御ノクサ八日小名親のれ
わく源代の角雅系を至テ都政代ハ少え一中
村主大左近れ松監ち神正賢立トテテムニテ
吹けりハ保延のあ久ノアケシタモヤタ都代
ノモ半解カズ約半近代大都氏ホヤセ城ヲ
主テキテノ西賢カモアスラレタヒテモ
同三年六月廿三日宇治庄内主官小内川井主時
院所所らノウキテ山高下主モ大内守第代主
信大納采坐立家主支參通篇リテ山高下主モ

きりに孝船用舟のりてありて陞船城保へきり天
晴てさう大納言より詔至れ

同水六月院湯和子そゆ往ふきり太麻布唐寫依
革船大納言多能^{タケル}孝船比巴國守達爾公雅東室
左鷹尉元歐箇純^{ヨウジン}もる季より革隼^{カモシカ}集^{シテ}有^リ當
みかく内調整^{シテ}海^{シテ}御^スと養^シせられり^セ始^スすけ
おはのうへ下^スおおどきまえきりひだもくら
のあふぢうれきり^{シテ}ゆかんゆ臺^{タマ}坐^スせ代^スきんを付
し^{シテ}歸^ス南面^{ミソチ}あくびあそび^{シテ}まする孝船^{エイボ}を^{シテ}
みさうのゆふはと^{シテ}御^ス御^スてりきり^{シテ}御^ス命^{ムツ}を^{シテ}
古今卷六

○三十三

ぞ如ふううあれがくへ乃ふまわ野人^{ノマハト}てさうじ
舊^{シテ}の無^シうつ^シきゆひう^シめそ^シざわくさんわ
く^シたすまめ^シ也

同^シ八年^ヒは^{シテ}御^ス一^{シテ}行^ス令^ス小^シ道^{アリ}て^{シテ}冒^ス行^ス
きり太麻布少^シ政^{シテ}不^シ肉^{シテ}不^シ食^{シテ}わ^シり^{シテ}あ^シり^{シテ}大
麻^シの革^{シテ}隼^{シテ}延^スり^{シテ}ば^{シテ}う^{シテ}す^{シテ}ぐ^{シテ}り^{シテ}作^ス
られされば^{シテ}肉^{シテ}不^シ食^{シテ}又^{シテ}亮^{シテ}歌^{シテ}御^スト^{シテ}は^{シテ}凌^ス
そ^{シテ}か^{シテ}び^{シテ}う^{シテ}手^{シテ}も^{シテ}邊^{シテ}す^{シテ}も^{シテ}西^{シテ}こ^{シテ}
定^{シテ}く^{シテ}の^{シテ}を^{シテ}は^{シテ}う^{シテ}ゆ^{シテ}つ^{シテ}の^{シテ}御^スよ^シや^シと^{シテ}
口^{シテ}き^{シテ}づ^{シテ}ご^{シテ}し^{シテ}ゆ^{シテ}き^{シテ}清^{シテ}改^スハ^{シテ}清^{シテ}子^{シテ}箇^{シテ}は

一れりのあてそとくにぞれ

或ひやて多經ありて即小財を備へ候が
りくやもむかうに財廉義会序と作せり財
元年くあもれ西倉もく沙酒れめらんよりは具
をく形とて坐候うそて中召ふあ所ゆすておけ
て喰くろき。滋慢大なりきり沙酒大酒されづれ
きる舊会序のす拘すあり三すある今之せアリキ
十二拘すれ因て皆八拘すとびらかぬつれを先
事へ奉まうべからぬへ奉そりあひのう奉
ス拘すれけの拘すとト先へ奉よひとて奉

古今卷六

○三二

小雨りゆて奉詔りてよ向く奉詔りよ而
て前若み拘すと奉く同毛敷方と思く奉
ああ紙片を代へ南小雨く三拘す小に向くみ拘
み前よりまくへとつそれされハ前人を近寄てみ
拘す方代りて奉すゆゆくも半かどもひ
きる御序奥八拘すとて名義をり奉候
サの並相ひり候へられする事とお手に見えり
也されば西元平つてくさくまよや半事かぢに過
渡合二官給大一小麥生る財義拘すあ候りくに
て正作は國半人形體是李財元支院へおけりと

事事通算トドリシカドヒテ其食ハニ佐内所ハトモ
グロムクアハシナシ小ギベーとモ作リタルの還
家捕ホハアサヒナホサヅモアマタマレタリ御院
御院御院モミタニ義合ノ具モ作リテソリ御院
ト後家捕ニ義合トゾヒトと作リトセアリテ
事毛キタカモハシメの家人ミヒト家捕の吉集
トオシクジ人のヤツラモモギはドモシキロモノハ麻
トテモアハテ四郎小太郎モササゲヤシテハシ
の財ヒシヒシシルアヒヤモモカヒササガタリヒ
シキ事ハシルアヒヤモモカヒササガタリヒ

古今卷六

○三十六

也始多磨面モアサナリサムニ生松小モア
おうれアリ是小アリテモ風流トテケアリのミ
モ松小アリ今リ寛治ニ年六月相嗣御傳本義
一具飾少茅大較つゝ油フリトモ吉高小打
竹モ旦色法流清アリトあり無不也
御室而後作リテキスハ万能系ヘゆリトカリ吹
角ト人ヘミシテアリキレ先失ドリハセアモ音
吹づきセシ形態モミタモ其音極めアヘドモ大納言
官後ハモケモトシ附せめモセテ喰テ

自御院御院ニ至重金ノリモセ候仰小中門

の扇めへ新代件序喰どあふ家能に作れて
アラシツるを財を賣つてくどやうと此ひ年秋
自ら代森返れ山麓と齋て至ニ山巒至てと
くも作へ御事又方處小乃きりが家所考
一考り山巒をきくとぞひみドヒムサクレ
因流年代ひせねやうなり初夜のかひつゝる
か山巒をきくに付する若きりとぞ金扇
を山巒にあたててそのひれとぞ山巒行
まよと山人てスミタハ山巒のつうりせり
うと第モウの新のこゑアハアアナラモ

古今卷六

○三十六

扇めへ新代件序

ち朝代八幡ノ一法事とく山神余りれざれ
ムケテ山翁代かを路きり山狗子持本資管
左肩納本みくそり路きり山狗子持本資管
の及上人とぞそれより脩法前司季萬作
筆次乃切が山とぞへきり山兼人長にて
りうきは作をとぞ山からくるふ財を出せる
ゆと車をば以て山兼人トアリをとふき
主税をあすねとぞ山人ひうち耕れ山人
あむとぞ山人とぞ山人ひうち耕れ山人

御内へまことに御内へてうなだれ下りて也事多相
えきり足利されハ多近方也とせつもそひのう
を定めしにせよ。かくはくとあきらめ
おりまじ今若ち乍ら皆ひ秘院あられ候
とぞりのう萬方がもくさうされど萬法の生れ
をゆきり也抱かくとてやうけとさ人共將と
冠ふくく川並むるや毛船院モテ候り

康治元年三月四日奉等此一切諒令天皇院御
幸ひて入内後下高也詔より喜慶院御幸
きく附行則よりハ光時御端急あて五代院

古今卷六

○三七

行則一五代院才て切絶たり入内後修ノ事
キニ第ニ及代ノ行則院才て代モ才テ第ニ及
の財モひきぬづまそひきり弟大相家宗備主時
六納言あくわれを敵がよまれる康和院才
光時が曾祖父光宗才て及ノ事ノ事也
光財ニ及城主あくわれモ光宗松庵焉うも中守
左肩内紀より件のひりモもうち更財城主もこれ
をゆきるやうと毛船院御内へてゆきなり

同式年八月勅院臺灣波と法源す。まう植代れ
不足小民志不成め。こそれからて明徳院御内

さうきく紙を、華人老時アラハ白羽代小付に
依テアグガ或志不見御縁と願て候。今も
残カ一世の漫遊にて、おもてかねば一毛は又
山海城内幾ドナラ付ヲハ哉有不ア作中御縁
とあつておれ老時、一言上度の小品アリや
老時よりもとぞ、恐れせむ。

久安二年九月士百法皇天王寺人内筆をさう

内大臣源氏小川セ故ハナリ士百金佛事モ
管経多ナリ。すが苗資喰茎内天台華葉
俊聖約ト組不據のうとヤテふうざうを比巴

古今卷六

○三十八

佐西革六度無別、西光遷法皇箇代少セ
シテ沙門の易カムヒテアガタラア。也
ちテ薄か小カクレミセカウ。浦カムヒヌアビ
後カムビカドタムヒセカウ。浦カムヒ先雙頭
多被因氣契微。寔安名号の様。我次平綱万葉集
音之卷第ニ基。被因氣不常采因。寔扶南老君子迴
忽耳列陰臚。佐勢海廟門。更衣流水橋。參島盤

勝調秋風樂

初一拍

二三拍

鳥向樂万秋樂一拍 積合五音 桂猿老 積真者

破素海波竹林樂二三拍 拍擅千秋系才不催了承

ひきりともや朝鮮今振風浪年ど数なんど
資賃料トモつてゆきもす朝鮮ハ法皇御禁
ヨリトモトモはすうちもん唐経つてゆき
人も與よせんと是遷佐馬場高麗御禁
法皇の御禁に資賃ハ憲も余れもあらずと
えいんもまくをけびのすくらんめんがふお
きん

同三年十月本官也合利緒と行もあらうと
萬人後任也行りて平調鑿歩調のありと定め
べしと申せとされ等内府へはなふ事う取て

と定めやまねど左の雅定中代の太田弘吉
ぞ平調もあらゆるに申せられすと後任中府云慶
毛鑿歩調と申せば是やまれむと申すと平調と云ふ
と申定めさり内大臣左の葉山領也納云在西の
伊豆に崩御とされうる在西の最季為和とい
ゆふと申すと小次を越調又鑿歩調與すもあり
すうと申すと今度万葉示と及ぶるにその葉三葉
雅示と申す延也紙生紙と申すあらうと申す

一
みも

因六年十二月大定大納言源兼の爲より人材を
廢の援ひの面紙と傍書とがれうきに八日此
事の差からぬよりして御ものありては面紙もや
く府よりと遣り奉らるゝ事と申あつた也
少と多くもあれどりなど見てよしと是れ
ぞ裏れ候。右相模守延暦大一年七月一日達く書
こうかそれおもて無て然て府かられかぎり